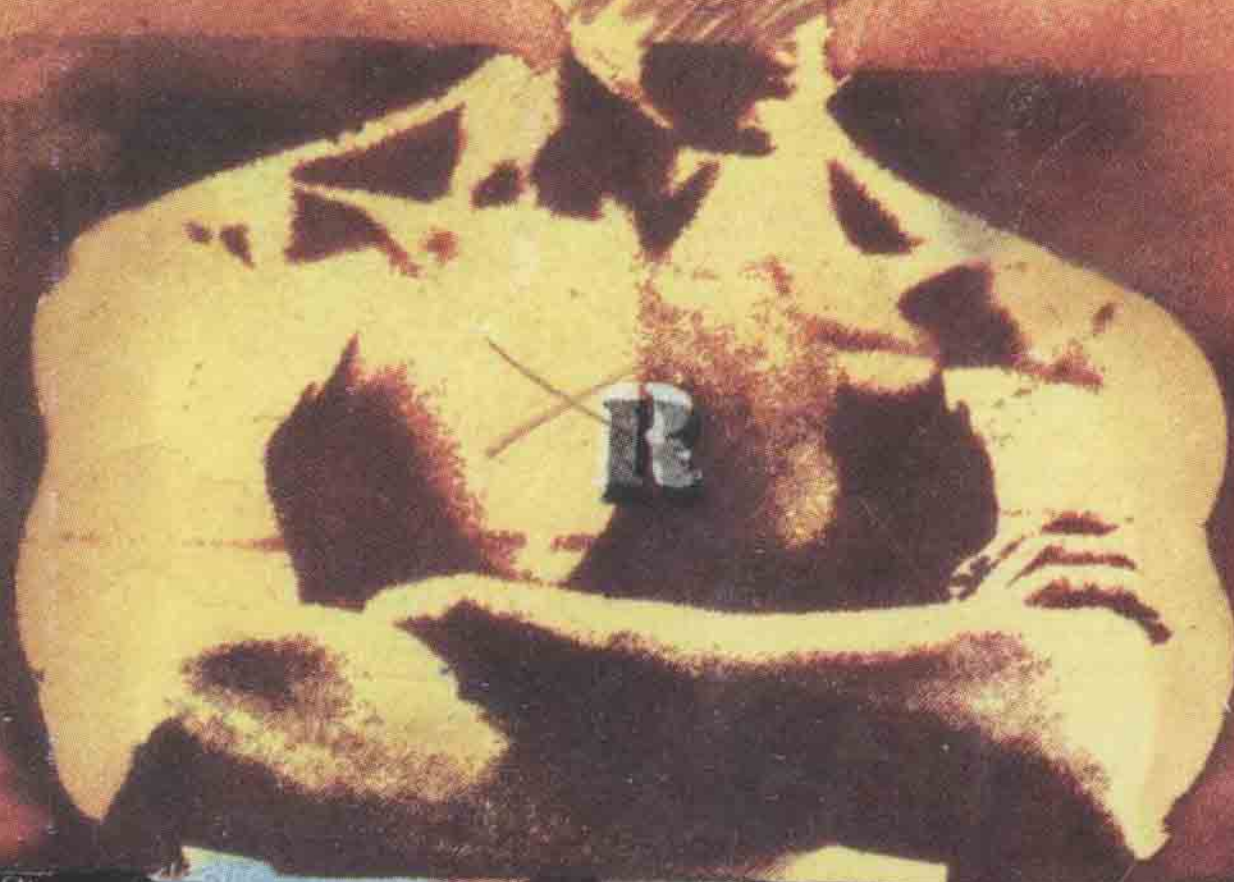


雄の時代

生島治郎



雄の時代

生島治郎

昭和53年6月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 廣濟堂印刷株式会社

印 刷 廣濟堂印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Jiro Ikushima 1978

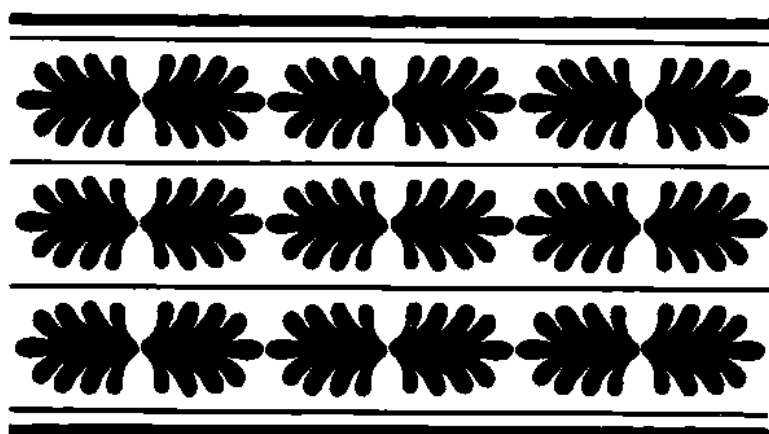
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

雄の時代

生島治郎



講談社

目次

第一章	陰の実力者……………	六
第二章	過去への道……………	三一
第三章	ある疑惑……………	六四
第四章	髻を切る……………	一〇九
第五章	モンスター誕生……………	一四八
第六章	暗い情熱……………	二〇二
第七章	巨星の消える時……………	二四六

解説

青木雨彦 三〇四

雄の時代

第一章 陰の実力者

1

その日は、朝から小雨が降りつづいていた。

井筒冷一は古ぼけたグレイのコンクリートの壁に雨のあとをにじませた中央日々新聞社の社屋へ入ると、四階の社会部の部屋へ登っていった。

レインコートを脱ぎ、いつものとおり、煙草をくわえたと、デスクの上の新聞にぎっと眼を通す。すでに、自宅で一度眼を通していたので、めばしい記事の載っていないのはわかった。

くわえ煙草の煙^{けむ}りが眼を刺激するので、眼をほそめながら、彼は紙面から眼をあげ、憂うつそうに窓の外を眺^{なが}めた。スモッグと小雨のせいで、街は乳色にけむり、その中を車や人の群が右往左往している。ぼんやりそれを見ているうちに、彼は身内によんだ疲労がますます色濃くなってくるような気がした。

この三カ月間というもの、彼は一度も鉛筆をにぎっていなかった。なにか適当なつづきものを取材しろと部長に云^いわれているものの、これといった興味をひくネタにぶつからなかったし、それを探して歩くほどの意欲はなかった。

（十年以前のおれなら、そうではなかったらう……）

窓の外をぼんやり眺めながら、彼は思った。

（十年以前——おれはどんな事件にも耳をそばだて、どんな聞きこみにもたちまち眼を光らせて、とびだしていったものだ）

しかし、今は……。

今は、彼はなんにも興味を感じなかった。

事件の発生から終決まで、おおよそのアタリをつけることができたし、その事件のまわりにごめく人間の心理もうわかりきっていた。

情事をしつくした老人のように、彼は社会的事件に退屈しきっていた。

（もう、おれは新聞記者失格なのかもしれんな）

彼の唇^{くちびる}を苦笑がよぎった。

自分の記事が載るたびに——たとえそれが、三行程度の記事でもていねいにスクラップしていた新米記者の頃^{ころ}がなつかしかった。

あの頃の自分は出走直前の競走馬のようにはりきっていた。なにはともあれ、走るということに本能的な歓びを感じていた。ところが、今はもうすっかり、走るということに歓びを感じられなくなってしまうのだ。どんなコースも知りつくしてしまっていたし、そのコースをどんなふうにして走り、どういうかけひきをつかえば何着になれるかということもわかっている。ベテランでしぶとくて、ずるがしこく、そして疲れ退屈している老馬だ。

（いったいどうしてこんなことになったのだろう？）

考えてみると、彼はまだ三十六歳だった。何事にも退屈してしまうには早すぎる年齢だ。にも

かわらず、彼は自分の仕事にいや気がさしていた。新聞記者という職業に退屈してしまっているのだ。特ダネをぬくという功名心にも、囲みに名文を書くという自己満足にも、すでに食傷していた。それがいったい、どれほどのことがあるというのか？

すでに、彼は自分の記事をスクラップすることをしなくなってから久しくなる。そして、それ以前のスクラップ・ブックは読み返されることもなく、本棚の隅で埃をかぶっていた。

スランプというわけではなかった。スランプは今までも何度か経験したことはあるが、こんなものではない。いつでも、それを突きやぶらなければというあせりが心の底にあるものだ。しかし、今はそのあせりもない。心の底にわだかまっているのは、ただものうい退屈だけだ。

彼は短くなった煙草をひしゃげた灰皿の中へ押しつけ、新しい煙草をくわえた。

今日も一日、こんなふうにして終っていきそうだった。煙草をふかし、近所の喫茶店へ行つてコーヒーを呑み、退社時刻がくれば馴染みの酒場へ寄つてウイスキーを呑み、夜半に帰宅する。この三カ月間、そうして暮してきたのだ。

彼は新しい煙草に火を点け、これを吸い終つたら、喫茶店へコーヒーを呑みに行こうと心に決めた。

その時、給仕が彼のデスクの横にやってきた。

「井筒さん、部長が呼びですよ」

「部長が？」

井筒は憂うつそうに眉をあげた。社会部長の佐々木信雄は彼がもっとも苦手とする男だった。どうせ、つづきもののいいネタがあつたかどうか訊かれるにきまつている。

しかし、いずれにしても、その関門は通らなければならぬのだ。一週間に一回、彼は必ず部長から催促を受けていた。

「よし、すぐ行く」

溜息^{ためいき}を吐きながら、彼は立ち上った。

社会部の部屋を横切り、部長室と記されたくもりガラスをノックした。

「おう」

野ぶとい声の中から響いてきた。

井筒は黙って扉^{とびら}を開け、中へ入った。

インターフォン、電話、書類、灰皿のほか一見必要とは思われないものまでがところせましと並べられているデスクを前にして佐々木部長は腰を下ろし、百科事典に読みふけていた。色が黒く、それと対照的に短く刈った頭髮は真白だった。丸顔でまるっこい鼻、まるいきよんとした眼、まるまると肥った身体——部長は黒いタドンのような印象を与える。グレイの地に白いストライプの入ったなかなかしゃれた洋服を身につけているのだが、彼が着ていると、一向にそれがしゃれたふうには見えなかった。背広の前は煙草の灰だらけで、咽喉^{のど}もとをゆるめた黒のネクタイは垢^{あか}びかりがしてよじれていた。

佐々木部長はおよそ社会部長という俊敏な役名に似つかわしくない風貌^{ふうぼう}をしていた。しかし、この男が、すばらしい名文家であり、事件の核心を居ながらにしてズバリと云いあてる秀れたカンの持主であることは社内の誰^{だれ}でもが知っていることだった。それに、彼はその人なつこい風貌を武器にして、どこへでも入りこんでいき、誰とでも親しくなれるという特権を身につけてい

た。そのおかげで、部長は上層下層を問わず、あらゆるところに顔が利いた。

「よう」

そう云つて、彼は視線をあげると、百科事典をボタンと閉じて、無造作にデスクの上のガラクトの上に置いた。

「どうした、不景気な面をしているじゃないか？」

「さっきまではそうでもなかったんですがね」

と井筒は答えた。

部長が呼んでいるとこどもさんに云われたとたんにこんな面つきになったんです」

「ふん……」

部長は鼻の先で笑った。

「そんなことを云って、先手を打ったつもりかもしれないがそうはいかんぞ。おれはもう三カ月もきみからいいたよりはないかと首を長くして待っているんだ」

「それがどうも興味のあるネタにぶつかりませんのでね」

「一日中社内にくすぶっているか喫茶店へ行くかしていたんじゃ、ネタにはぶつかりっこないさ」

どうやら、部長は井筒の毎日の動静をいつの間にかちゃんと心得ているらしかった。

「興味をひくネタがないんですよ。なにもかもつまらなく思えてね……」

と井筒は答えた。

「スランプかね？」

部長はまるっこい眼を細めた。

「そうでもないんですな」

井筒は、意味もなく顎をなでた。

「以前興味を持ったネタが、まったく面白くなっちゃったんです。もう、社をやめた方がいいんじゃないんですかね……」

「そういうことがあるもんだ。大遊軍で記者生活のなにもかも知りつくしてしまうと、そんな気分になることがある。おれもそうだった」

部長はごしごしと頭をかいた。

「しかし、しばらくすると、それがそうでなくなってくる。それまでは読者へのサービスのために記事を書くことを、歓びと感じられるし、他社よりぬきんでて特種をものすることが生き甲斐だったものが、全然無意味におもえてくる。おれにも経験があるがね……」

じつと井筒の方を部長はみつめた。

「今、きみはちょうどそんなところへさしかかっているんだ。そういう時は、まったくエゴイスチックになって、自分のために記事を書くことに専念することだ。自分の興味のあるつづきものをただ書いてみることだな。読者や特種を意識しないで書いてみるんだよ。それが案外特効薬になるかもしれない。そいつをやってみてはどうかね？」

「しかし、自分の興味のあるネタというのがみつからないんですよ」

「そうかな」

部長は首をかしげた。

「たとえば、このネタだが、こいつは読んだかね？」

デスクの上の朝刊を部長は開いて、井筒に示した。太い指先で差したところは、あるプロレスラーがホテルへ押しかけ、自分たちの所属するクラブが興行する以外のリングへ出るなど云って、外国から来たプロレスラーを殴りつけたという記事が載っていた。

「それなら読みましたよ」

井筒はものうげにうなずいた。

「しかし、大した記事じゃないし、あまり興味は持てなかったな」

「この記事そのものは大したことはない。しかし、これにはウラがあるんだ。なぜ、こんなふうプロレスラー同士が殴り合いをやらかすかということだな、これは今まで一本にまとまっていた日本のプロレスリングが、二つに分裂したからなんだ。きみも知ってのとおり、海竜が生きている間は、こんなことはなかった。日本のプロレスは世界プロレスラー協会一本に統一され、海竜の牛耳るままに、興行をうって大変な人気だった。これを中継するテレビも、東洋テレビに決っていたんだ。ところが、海竜の死後、日本のプロレスラー界は分裂した。世界プロレスラー協会の他に、ユニヴァーサル・プロレスリング協会ができて、世界プロレスの若手がそっちへ走った。この試合の中継は中央テレビが流すことになっている。この二つのプロレスが行なわれるのが今夜だ」

部長は眼をつぶった。

「プロレスラーが殴り合いを演じた背後にはこういういきさつがからまっている。海竜が生きていたら、あり得ないことだ。こうしてみると、いいにしろ、悪いにしろ、海竜という男がプロレ

ス界でいかに偉大な力を持っていたかがわかる」

眼を開けて、部長は井筒を見あげた。

「この事件を手がかりに記事を書いてみようと思わんかね？」

「思いませんな」

井筒はにべもなく答えた。

「わたしはプロレスに興味はない。たしかに、海竜がはじめて日本でプロレスの興行をはじめた頃は、わたしもよくテレビのある喫茶店へ通いましたかね……。あの頃は、テレビも初期の頃で、ものめずらしきもあって、プロレスは大した人気だった。プロレスの中継というと、黒山の人ばかりだったものです。しかし、今では、あまり興味がないな」

「おれはきみにプロレスのことを書けと云っているんじゃない。なぜ、そんなにプロレスが人気があったのか？ また、海竜になぜそれだけの権力があつたのか？ そいつを調べてみるというんだ」

部長はせわしなく、デスクの端を太い指でたたいた。

「プロレスラーは単純だ。しかし、プロレス界は複雑な利害がからまっている。『リングの死闘』とか『血の復讐』とかスポーツ紙が景気よくうたいあげるリングの上でのことはきみにも興味がなからうし、またおれもそんなことを書けとはいっていない。リングの裏でどんな人間がどんな闘いをやっているかを調べてみるといっているんだ。特に、この死んだ海竜という男の人間性にはいろいろな面白いところがある。彼があれだけ、大きな力を持てたのは弘前太助という男の興行師がついていたからだといわれている。彼は海竜が相撲界から引退し、プロレスをやりはじめたとき

に、バックアップした人物なんだ。弘前が海竜をたすけ、プロレスを日本で育てた。むしろ、日本のプロレスが一本にまとまっていたのはこの人物のおかげといわれている。海竜は死んだが、弘前は生きている。にもかかわらずプロレス界は分裂した。その謎をきみは解いてみようと思わんか？」

「わかりました」

井筒は微笑した。

「どうやら、あんたの罠にかかったようですね。その弘前という人物に興味を持ってきましたよ。彼はどこにいるんです」

「ユニヴァーサル・プロレスリング協会主催の初試合が今夜六時に築地の体育館で行なわれる。

弘前太助は多分それを観に行くだろう」

それだけ云うと、部長は読みかけていた百科事典をデスクの上からとりあげ、つづきを読みはじめた。もう、眼の前にいる井筒のことなど念頭にない様子だった。

（くえないおやじだ）

井筒は苦笑した。

（自分の育てた犬が、どんな餌なら食いつき、どんな獲物に向ってなら走りだすかをよく心得てやがる）

「とにかく、その弘前という人物に逢ってみます。しかし、その人物に興味が持てなかったら、ぼくは記事は書きませんよ」

そう捨てぜりふを残すと、井筒は部長室から出た。

井筒は自分のデスクに帰ると、もう一本煙草をふかしながら、窓の外をみつめた。小雨はまだ降りやまなかった。

しかし、さっきのように、彼は小雨をぼんやり眺めてはいなかった。プロレスラーのチャンピオンとしてばかりではなく、各種の企業にも手を出し、事業家としても成功しながら、最後には市井のヤクザに刺殺されてしまった海竜という男と、その陰で、実際に海竜を動かし得る唯一の実力者だった弘前太助という人物をどういう角度でとらえてみようかと考えていた。

そんな自分に気がつくと、彼は舌うちをした。部長はたくみな催眠術師であり、自分はまんまとその術にかかってしまったのだ。いずれにしても、その術にかかったことで、さっきまでのもの憂い気だるさは消え失せてしまっていた。

彼は自分が徐々にはあるが、新聞記者としてのはりつめた探究心を取りもどしつつあるのを感じた。部長の術にかかったということはいまいいことではあるが、それが生き甲斐であることは事実だった。

（どういうふうにしてこの二人の人物にメスを入れるか？）

その見当もつかなかった。井筒は今までにスポーツ担当になったことはなかったし、そういうことに、まったく興味はなかった。

正攻法でいけば、スポーツ部のプロレスにくわしい記者から予備知識を得ることが、まず無難なやり方なのだろうが、彼はなんとなくそうしたくなかった。スポーツ記者の書くものとは全然